

天花

TENGE

山口県立美術館ニュース

第58号

平成6年7月1日
発行山口県立美術館



川原舜
「フランソワーズ・サガン」

表紙作品解説

川原舜

1927~

フランソワーズ・サガン

1954~55年

ゼラチン・シルヴァー・プリント 39.5×26.9cm

「フランソワーズ・サガンは興味ある少女だった。ひどく神経質で、ひどく移り気な感じがした。今年十九歳だというが、時にとても乙女らしく赤くなつたり、時に中年女のよくな分別くさい顔をした。どこか普通の少女と變つたところがあつた。」この作品は「藝術新潮」一九五五年九月号に、「一九五五年の藝術家」として、掲載された作品のうち的一点で、前掲の文章は同時に掲載された「カメラで見た藝術家」という彼によるエッセイの一節である。

一九五四年、早稲田大学を出た川原舜は、留学のためにヨーロッパに渡る。パリにおちついた川原は大学時代から親しんでいたカメラを手に積極的な行動を始める。映画を見て、気に入った女優があれば、電話をしてそのアバルトマンを訪ねたり、ジャン・ルノワールの場合には撮影現場まで出むいて、会つたりしている。パリだけでなく、パブロ・カザルスに会うためには、手紙を出し、スペイン国境にちかいプラードの家まで訪ねている。

「これらの人達はみんなまことに親切だった。考えてみれば、自分と何の利害関係もなく、又、はるばる遠い國からやつて来た人間には誰し

もが親切なのだろうが、それでもこれ等の人々に會つて無駄話をしたことは、宿のコンシェルジュや居酒屋のおやじさんとおしやべりしたのと違う意味で私には大きな収穫があつたように思う。居酒屋のおやじさんも含めて私はギリシヤ以來西歐文明が打出した「人間」を見たと思うし、精神の自由と寛容をつくづく欲しいと思つた」（「カメラで見た藝術家」）

敗戦をむかえ、それまでの世界がくずれ、いやおうなく新しい世界がむかえざるをえなかつた世代が真摯に自己を模索している姿がここにはある。ポトレート作品には写されるものと写すものとの関係そのものが現出する。「どこか、普通の少女と變つた」サガンが「乙女らしく」はにかんだ一瞬をとらえたこのポトレートから受けるあたたかい手ざわりは、写すものとしての川原が、サガンに対し「人間」としてむかひあい、その「精神の自由」に対して抱いた深い共感もたらずものではないか。

帰国した川原は、大学の後輩である奈良原一高にさそわれ、第一回の「一〇人の眼」展に参加する。この展覧会が戦後写真史のうえでなくなった重要性はさまざまに語られており、

ここでは触れない。ただ、川原が「ポトフォリオ」という当時はあまり耳なれないことばを作品名として参加していることに注目してこう。「ポトフォリオ」とは「自分の作品のなから、特定の目的のために何枚かの写真を選びだしてまとめた作品集である」（『写真大事典』講談社）。「一〇人の眼」展の他の出品者が「水上小学校」（東松照明）「シラス地帯・台風地帯」（川田喜久治）「坑夫・ヌード」（奈良原一高）など被写体を作品名として出しているのに対し、この時点における川原の「ポトフォリオ」には、アメリカで写真を身につけた石元泰博が「作品」として出品しているのと同質の作家としての自覚と成熟が感じられる。それが、同世代より一足はやくヨーロッパ体験によるものかどうかはさだかではない。しかし、川原は第二回「一〇人の眼」展には参加しない。そして、ほどなく静かに写真の世界から離れていく。第一回「一〇人の眼」展に出品した川田佐藤明、丹野章、東松、奈良原、細江英公の六人が「V I V O」を結成し、本格的に活動を始めようとしていた時であつた。

（榎本徹 当館学芸専門監）

ドイツ・ルネサンス版画名作展

デューラーとその時代

今から五〇〇年以上も前の一四七一年五月二十一日、ドイツのニュルンベルクに住むハンガリー出身の金細工師アルブレヒト・デューラーに、三番目の子供が生まれた。十八人兄弟のなかの次男として生まれたこの子供は、父にあやかり、名づけ親によつて同じアルブレヒトと命名された。父親は、幼い頃から熱心に学ぼうとするこの次男をことのほかかわいがり、学校に通わせて読み書きを覚えさせた。長じて、父について金細工の仕事を覚えた次男は、画家になりたいという希望を父に告げた。父は、金細工師の修行のために費やした今までの時間を惜しんだが、結局は次男の希望を許し、ミハエル・ヴオールゲムートの工房へ、三年の契約で徒弟奉公に出した。一四八六年のことであった。今なお西洋美術史上に燦然と輝く名前を残したアルブレヒト・デューラーが、画家となるべくした第一歩であった。

今から五〇〇年以上も前の一四七一年五月二十一日、ドイツのニュルンベルクに住むハンガリー出身の金細工師アルブレヒト・デューラーに、三番目の子供が生まれた。十八人兄弟のなかの次男として生まれたこの子供は、父にあやかり、名づけ親によつて同じアルブレヒトと命名された。父親は、幼い頃から熱心に学ぼうとするこの次男をことのほかかわいがり、学校に通わせて読み書きを覚えさせた。長じて、父について金細工の仕事を覚えた次男は、画家になりたいという希望を父に告げた。父は、金細工師の修行のために費やした今までの時間を惜しんだが、結局は次男の希望を許し、ミハエル・ヴオールゲムートの工房へ、三年の契約で徒弟奉公に出した。一四八六年のことであった。今なお西洋美術史上に燦然と輝く名前を残したアルブレヒト・デューラーが、画家となるべくした第一歩であった。

彼が生涯をかけて追求し、探究せんと欲したものは、色彩の問題ではなく、美しい人体はどのように測定され表現できるのかというフォルムの問題だったといわれている。すなわち、ルネサンスという新しい時代精神が生み出した全く新しい構図・比例理論を応用し、「彫刻のように手でつかめる形」(ヴェルフィン)を表現することだったのである。そうであるからこそ、線表現を主とする版画は、当時のデューラーにとつて、未開発の分野であるとともに、多大な創造的興味を抱かせる分野でもあったといえるのではないか。

このような問題意識をもつきっかけとなったのは、まだ若いデューラーがヴェネツィアに滞在中(一四九四―九五)、その画家・版画家であり理論家でもあったヤコポ・デ・バルバリに、比例規範に基づく人体素描を見せられたことによる。しかしバルバリは、デューラーにその構成法を明かさなかつたので、彼は独り、人体の比例関係の究明を誓ったといわれている。彼の探究の総決算は、晩年に記された理論書の草稿からもうかがうことができよう。いずれにせよ、今回の展覧会は、理論的探究とあいまって生み出されたデュー

ラーのすばらしい版画作品を、質量とも十分に鑑賞することのできるまたとない機会となるだろう。

もつとも、色彩の問題（絵画）と形の問題（版画）を単純に区別したままで、デューラーの芸術を論じることには慎重にならなければならぬ。おそらく、芸術創造の真の秘密は、色彩と形のもつそれぞれの問題を明確に区別しつつも、それらを総合させることにある。そうあるはずである。

かつて私は、ヨーロッパのいくつかの美術館で、デューラーと同時代の画家たちの作品を見比べたときに、デューラーの作品だけが際立って見えることの不思議を味わった。とりたてて述べることもないような、素朴な感想ではあるが、今ここで考えてみると、デューラーの作品が際立って見えたのは、まさに色彩と形が明確に区別されつつも、その総合が画家自らの「視覚の特殊な力、鋭さ、明度」（ヴェルフィン）において見事に達成されているからだだったのである。五〇〇年の時を越えて、今なお私たちに訴える（何か）を持ち続ける作品とは、そういうものなのではないかと思う。

（斎藤郁夫 当館学芸員）

会期	6月3日(金)～7月10日(日)
休館日	月曜日
入場料	一般 一〇〇〇(八〇〇)円
	高大生 六〇〇(四〇〇)円
	小中生 四〇〇(二〇〇)円
	() 内は20人以上の団体料金

2



1





7

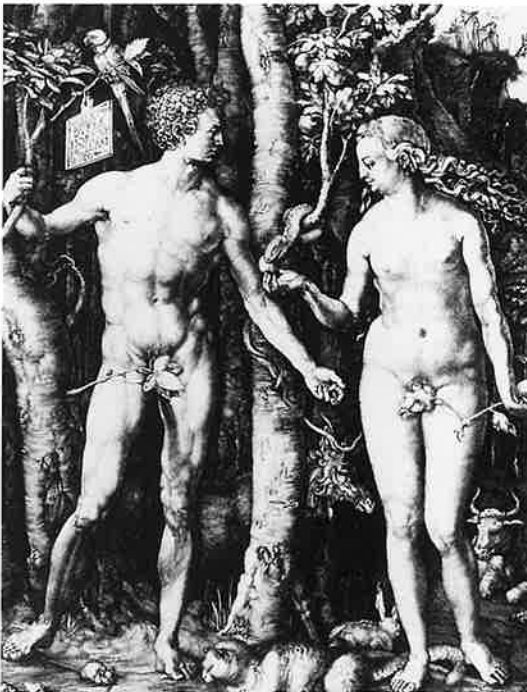


6



5

- 1 アルブレヒト・デューラー メランコリア I
- 2 アルブレヒト・デューラー 書斎の聖ヒエロニムス
- 3 アルブレヒト・デューラー 騎士と死と悪魔
- 4 アルブレヒト・デューラー アダムとエヴァ
- 5 ミヒャエル・ヴォールゲムート ダリウス王と預言者ダニエル (『シャッツベハルター』より)
- 6 ゲオルク・ペンツ 兄弟に穴に投げられるヨゼフ
- 7 ルーカス・ファン・レイデン 外科医



4



3

室町時代の雪舟流

一九九三年一〇月二日～十一月二日

山口県立美術館は近現代美術を主たる対象として活動しているが、一方では山口の美術史、ことに雪舟や雲谷派の画家たちがいた中近世の絵

永祿二年（一五九三）の雲谷等顔による雲谷軒再興までのあいだにおける雪舟の後継者たちが、この企画の主たる対象作家である。

画史を眼に見えるかたちで紹介することをもめざしている。ことに雪舟、雲谷等顔といういわば全国の画家

これら雪舟から近世漢画諸派のあいだに位置する画人たちの検討は、伝雪舟画や雪舟そのものの理解に資

を擁する漢画系絵画あるいは水墨画というジャンルのなかでひとつのながれを捉えることが必要であると考

え、自主企画展の開催と作品収集を継続してきた。このたびの「室町時代の雪舟流」は一連の活動のなかで

ほとんど空白の部分であった雪舟と等顔というスターたちのあいだには

さらされた約一世紀の無名作家たちにスポットをあてた展覧会である。

「雪舟流」とは耳慣れないことばかもしれないが、画僧雪舟等楊の系譜に連なる画人たちを総称して古くからそう呼んでいる。そのうち狭い意味での雪舟直弟子筋の画人たち、すなわち雪舟生前から、永正三年（一五〇六）とされる没年を経て、

現在しられる室町期の雪舟流作家の伝称作品は全世界で三〇〇点をこ

え、自主企画展の開催と作品収集を継続してきた。このたびの「室町時代の雪舟流」は一連の活動のなかで

ほとんど空白の部分であった雪舟と等顔というスターたちのあいだには

さらされた約一世紀の無名作家たちにスポットをあてた展覧会である。

現在しられる室町期の雪舟流作家の伝称作品は全世界で三〇〇点をこ

え、自主企画展の開催と作品収集を継続してきた。このたびの「室町時代の雪舟流」は一連の活動のなかで

ほとんど空白の部分であった雪舟と等顔というスターたちのあいだには

さらされた約一世紀の無名作家たちにスポットをあてた展覧会である。

現在しられる室町期の雪舟流作家の伝称作品は全世界で三〇〇点をこ

え、自主企画展の開催と作品収集を継続してきた。このたびの「室町時代の雪舟流」は一連の活動のなかで

ほとんど空白の部分であった雪舟と等顔というスターたちのあいだには

さらされた約一世紀の無名作家たちにスポットをあてた展覧会である。

現在しられる室町期の雪舟流作家の伝称作品は全世界で三〇〇点をこ



伝秋月「山水図」

えると思われるが、それらのなかで基準となる作品は多くはない。しかもはやくアメリカに渡ってしまった作品が相当数にのぼる。国内の作品だけで構成する場合、新出作品が多くなるのが予想されたが、結果として未紹介作品を多数盛り込むことができたのは幸いであった。多くの所蔵者のかたがたの作品調査と出品へのご協力の賜物である。

本英男氏の指導助言を得ることができ、先行研究の乏しいなか困難なテーマに取組んだ貴重な論文を三氏にお寄せいただき、今後の研究の展望が示されたように思う。ここで詳しくはふれられないので、カタログをご一読願いたい。

カタログは、展覧会の性格上資料集的な内容を企画段階から考えていた。売立目録の写真資料や江戸時代の画論資料などをはじめ、とりわけ東京国立博物館の協力を得て狩野家模本の写真を掲載できたのは、それらが作品に準ずる重要な資料だけに大きな成果であった。また、展覧会の企画・運営、カタログの作成をうじて、河合正朝氏・鳥尾新氏・山

本展覧会を顧みて、全体として企画段階での所期の目的はおおむね果たされたのではないかと企画者は勝手に思い込んでいる。本展覧会の企画そのものには結論めいた明確な主張はなかったが、作品調査とカタログの作成を通じて種々の問題点が浮び上がってきたからである。いまは多くのかたがたの協力を感謝するとともに、本展を契機にあらためて雪舟流の問題を考えたいと願っている。

（福島恒徳 当館研究員）

展覧会レポート2

アイerland国立美術館名品展

一九九四年一月五日～二月二〇日

アイerlandといえば、ケルト文化の長い伝統を持ち、とくに近代文学の中では、バーナード・ショーやジェイムス・ジョイスなどの文豪を生んだ文化的風土をイメージすることができる。しかし、首都ダブリンにある国立美術館は、これまでわが国に紹介されることがなかった。

一八六四年に開館した、ヨーロッパの中では比較的新しいアイerland国立美術館は、数多くの篤志家や有能な館長によって、そのコレクションが形成され、現在ではヨーロッパ有数の美術館となっている。

展示作品の総数は五三三。その内容は、ルネサンス、バロック、ロココを中心として、ティツィアーノ、テイントレット、ヴェロネーゼなどのヴェネツィア派、ルーベンス、ヨルダンス、ロイスダールに代表されるオランダ・フランドル派、そしてエル・グレコ、スルバラン、ゴヤなどのスペイン絵画、さらにはプッサンからシャルダン、ブーシエを経

てドラクロワに至るフランス絵画など、ヨーロッパ美術の本道をゆく作品であった。

アイerland側の全面的な協力により、ティツィアーノやルーベンスの大画面の作品に目近に接することができたのは、ヨーロッパ美術の真髄にふれるまたとない機会となった。

(斎藤郁夫 当館学芸員)



左 エル・グレコ 聖痕を受ける聖フランチェスコ
下右 ゴヤ 黒いマンティーリャの婦人
下左 ルーベンス 貢の銭を見出す聖ペテロ



研究ノート

江内春朝のこと

安井雄一郎

以前ジャポニスムのからみで山口県萩出身の日本画家、高島北海のことを調べていたころ、光井玄吉という福岡県の方が訪ねてこられた。用件は、氏が早稲田大学の学生だった時代に大きな影響をうけた人がいて、江内春朝という日本画家だった。いまはもう亡くなったが、自分はこの人の「ロー画」(クレパス)をもっている。山口県光市のご出身ということで、できれば山口で顕彰してもらえないか、というものだった。

聞くと、経歴は大変面白い。しかし、拝見した晩年のロー画は春朝の代表作とはみづらい印象をもった。これを機に、光井氏の紹介で、かつて春朝に懇意だったという岡田友雄氏(東京)に面識を得た。岡田氏のご協力を得て、春朝生前の作品をさがすことにしばらく熱中したが、結局みつけだすことはできなかった。

この事情は、あれから一〇年以上がたつ今も変わっていない。経歴のほうも、おふたりに通して知り得た

範囲を出ていないが、もしこれをお読みいただいた方で、春朝のこと、春朝の作品についてご存じの方がおられれば、ご教示いただければ幸いです。

以下の経歴は、主としておふたりから聞いたことを整理したものである。いまひとつ光井氏がかつて春朝のもとで聞き書きされたノートからの引用を最後にまとめて掲載した。

◎画家になるまで

江内春朝(本名、江内喜作)は、一八八四(明治一七)年七月二五日、山口県熊毛郡室積、現在の光市大字室積浦八二番地の一に船大工の子として生まれた。一二歳で親元をはなれ親戚の経営する中学校をへて京都市美術工芸学校に入学。竹内栖鳳に師事した。同期に榊原紫峯、一年下に村上華岳がいたという。

同校を卒業後、日本美術院に入る目的で上京。初音に岡倉天心を訪ねるが、当時、天心一派は五浦時代。あとを追って五浦に行き、近郊に下宿して毎日、徒歩で美術院に通う。一年ほど滞留のち、天心の助言にしたがい渡欧を決心。天心から千円(岡田氏による)の旅費を貰い離日。朝鮮を経て大陸を経由してヨー

ロッパに向かった。

試みに時期の区分をすれば、以上がひとつの節目とといっていい。正確には分からないが、春朝が日本をたったのは二三、四歳ころと思われる。

◎パリ時代

春朝は、シベリヤ鉄道でモスクワまで行き、そこからさらにベルリンを経て一九〇九(明治四二)年一月にパリに着いた。パリ時代は五年ほどに及んだようで、春朝、二五歳から三〇歳のころである。

パリに着くと、ベルリンで知り合った同市日本人世話人代表の夏目某(人物不詳)の紹介で、パリ在住のふたりの日本人、東京日々新聞(現在の毎日新聞)の記者菊池幽芳と石田千之助(この人物についても未調査)を識る。そして、このふたりの紹介で画商と知り合い、この画商のもとで日本風席画会を数回設け、大きな成功をおさめたという。

これがかきつけかけとなり、翌一九一〇(明治四三)年の二、三月ごろにパリの素封家エチエンヌ・ブリコンの知遇を得、ブリコンの新築家屋の壁画装飾をひきうける。この仕事は一年半ほどつづいた。

ブリコンの壁画を手がけたことが世に知られると、日本画に関心をも

つ当時のジャポニザンたちは競って彼のアパートに出入りするようになったという。そのなかには、ル・クレール、キャリエール、ブローなどがいた。また、神戸で領事をしていたボサリユーという未亡人がひらいていた美術音楽塾に美術教師(日本画)の職を得、これはフランスを離れるときまで勤めたという。

この学校がどのようなものだったかは不明だが、パリのハイ・ソサエティの子女が通う花嫁学校の一つだったという。当時としては入手しにくい和紙が春朝のもとで手に入るといふ事情もあつて受講者も増え、ために正規の授業のほかに、アパートでの課外授業もやりはじめ、これは男女別に曜日をかえて行なったという。マチスも近くに住んでいて、時々、この自室での教室に女の顔を描いたデッサンをもってきて彼の意見を聴いていたといい、またモーリス・ドニは、一時期、春朝に弟子として師事したこともあったらしい。

岡田氏によると、彼らはヨーロッパ式のデッサンと異なる略画(漫画)の方法に魅かれ、日本画の輕易即妙な対象把握の手法と筆法を習得する目的で通つたのではないかといふ。

一九二二(大正元)年四月、シェークスピア学者アントルムの創作になる「日本の誉(ほまれ)」が、はじめてアーク灯の照明がとりつけられたオデオン座で上演された。春朝は、ドロロッチとともに名場面の写生を依頼されて描き、この芝居絵は、「イリュストラシオン」誌に掲載されたという。また、一九二二年から一三年にかけては、サロン・ドートンヌに自作画を出品した。

以上がパリ時代である。当時はまだトレーシングペーパーが開発されておらず、日本の和紙は透明度が高いということから雑誌などに使う石版画の制作では重宝がられていたという。春朝はおそらく独自のルートで和紙をとりよせていたのだろう。春朝の経歴では、このパリ時代がもっとも興味をひくが、残念ながら以上をこえる調査はしていない。また、この時期については、最後に掲載した光井氏の聞き書きにもない。

◎帰国後

一九一四(大正三)年、第一次世界大戦勃発。春朝は、戦争を避けるため世界一周を思いたつ。日本に帰ったのは、その寄留地のひとつだったのだろうか。しかし、八月ごろに帰国すると、そのまま日本に留まる

ことになる。その後、再興美術院からの再々の勧誘があったが、これは固辞し画壇とは関係を絶ちながらも五〇歳までは絵で生活し、ついで五〇歳で実業に転向した。以後は、クレパス、ついで晩年には水彩画に関心をよせたが、日本画はやめたようである。

その後、四〇年がたち、最晩年は山口県の親戚のもとに身をよせて亡くなったのは、昭和四九(一九七四)年七月四日、行年九〇歳だった。徳山市の無量寺に葬られた。

以上が、春朝の経歴である。最後に、光井氏の聞き書きからの引用を紹介する。

なお、光井氏の聞き書きの年記は、昭和三七年四月となっている。したがって、春朝七八歳のころのものである。原文そのまま引用したこの聞き書きには、春朝の肉声は聞こえてくるが、個々の発言の事実関係や真偽についてはまだ裏付けがとれないままである。また聞き書きには、彼の絵画論などもふくまれていて、ここでは取り上げていない。

なお、引用にあたっては、旧字旧仮名づかいは新字新仮名づかいに改めたが、原文はそのまま。誤字、あ

て字もそのまま引用した。また(一)内の数字は、聞き書きを整理した際に便宜的に付した番号、△▽内は、引用にあたってこれも便宜的に付した小見出しである。

(当館学芸課主任)

光井玄吉氏による春朝の聞き書き
(昭和三七年四月)

△幼年▽

私の生家は山口県熊毛郡室積で、光市より海岸に向って三十分の処です。父は船大工です。鹿兒島の出水市の近くに江内村と云うのがあって、そこより来たのではないかと云う事である。父は室積の近くの杵崎神社に石段と鳥居を寄進して居る。長州戦争の時、父は船大工の一隊をひき、白井小助のもとで働いた。その時のオノを杵崎神社に寄進して居る。私は故郷を出てから一度しか故郷に帰った事はない。又父に対しても愛着は感じて居ない。(以上一三―一四)

△中学から美術学校▽

私は親戚の経営する中学に入学し、その寮に入った。そして、その経営者の家の書生みたいな事をして、学資を得て居った。いわゆる苦学生みたいなものであった。その家のお嬢

さんが絵を習って居たが、私が教えて呉れと云つても教えて呉れず、いじわるをして絵を見せて呉れと云つても、絵を見せて呉れない。其処で一つそれなら自分が絵かきになってやれと云う事で、中学四年の時、京都の絵画専門学校に入学願書を出した処、入学を許可すると云う通知が来た。入学試験も何も無かつた訳で、多分希望者が少なかつたのではないだろうか。其処でコウリ一つでのこの京都に出かけて行つた。

私は十二歳で親元を離れ、中学に入学して以来、親から学資を送つてもらつた事はなく、すべて自分で生活の資を得て居た。京都の絵画専門学校に入つても、いわゆるアルバイトをしないとやって行けなかつた訳だ。其処で中学校の絵の先生の免許を取り、夜間中学校の先生をした。そして帰りは何時も寮の窓から帰つた。そして三年間、遂に先生にはわからずじまいだった。(以上七―八)

△日本美術院▽

「大観」は私の強い男であつた。「春草」は私の弱い、私の毒な男であつた。財政的圧迫を受け、一見して萎縮して居る様にみうけられた。消極的に過ぎてても、積極的に過ぎてても駄目である。(以上六)

フエノ口サが日本美術及び東洋美術の視察にやって来た。その時、天心が彼の通訳をした（美術がわかり且つ英語も出来ること云ふ事）。彼は帰国に際し美術学校の設立を建言し、その校長として天心を推薦した。処が天心は高等遊民で、理想ばかり高く、大言壮語するのみで実際の学校経営の才はなかった。そして文部省の役人をことごとく小僧よばわりして、いつもケンカばかりし、遂に自己の理想実現は美術学校では不可能であるとして、その上をゆくものとして（美術大学）日本美術院を谷中の初音町に創立した。従って日本美術院は学校です。然し経営難におち入り五浦に引越した。（以上一七）

大観は東京の美術学校を出て京都の絵画専門学校に教師としてやって来た。処が其処の主任教授であった竹内栖鳳とそりが合わず、田舎者あつかいをされ、いじめられたので面白くなく、ほとんど学校には出ないでお寺等に行つて模写ばかりして居た。終には辞表さえ出さずに東京に帰つてしまつた。いびり出された訳です。私が絵画専門学校に入学する一、二年前に辞めて居る。従つて、その絵画専門学校の出身である私は、美術院に入ると、坊主にくければケ

サ迄で、ことごとくにいびりやられた。遂にやり切れなくなつて、天心にもすめられるし、パリ行を思い立つた。五浦には同行した。五浦よりパリに行く。（以上一八）

△離日、シベリア經由でパリへ▽

その時、天心から旅費として幾ばかりの金をもらったが、とてもパリ迄行ける額ではなかつた。従つて、その金で先ず朝鮮に行った。

釜山に上陸し朝鮮の王室に絵を献上したいと申出た処、京城迄汽車賃を只にして呉れた。勿論、絵は献上した。（以上一九）

京城で日本人の大親某に逢い、自分の絵を京城の富豪に紹介して呉れる事を頼んだ。それは堂々たる広大な大邸宅で、某は虎の皮の上に坐つて居た。書生に案内されて彼の前に行く、某は「君の絵はいいのかね」と云うから私は「自信はありませんが」とケンソソして答えた。

某は「自分で自信のない絵を他人に紹介する訳にはゆかぬ」とぬかしおつた。此処で具合よく行かなくては行かず、朝鮮でノタレ死しなくてはならないので、私も必死であつた。「私は立派な画家になるためにパリに行く」として居るのだ。その

私が現在、立派な絵が描ける筈はないではないか。立派な絵が描ける位なら何もパリ迄絵の勉強をしに行く必要はないではないか。あなたも親分であるならそう云う画学生の意気を買つて助けて呉れてはどうか」と。

その他、とうとうとしてここを先途と必死になつて長弁舌を振つた。

某は今迄居丈高であつたのが様子が一変して黙して終始私の長弁舌をに聴き入つた。そして遂には涙をこぼした。そして「よろしい。紹介して上げよう」と云つた。

かくして、京城に一年程止まり、その間、某の紹介で富豪達に絵を売りパリ行の金をためた。かつ彼にも絵を大部かいてやり、向ふ一年間、月々の生活費を送つて呉れる約束をした。その約束は守らなかつたが、その事について私は何等彼をうらんで居ない。それ以上の世話になつて居るのだから。（以上二〇—二一）

「パリ時代は、先述のように光井氏の聞き書きにはない。——安井註」

△帰国、再興美術院への勧誘など▽

パリから帰つて下村観山に電話した処が不在であつたので、木村武山に電話した処が谷中の初音町の日本美術院再興式へ行つて居るとの事で、私も参列した。処がどうも空気がお

(以上八一九)

応挙と云う人は学問のない人ではあつたが、絵は非常にうまい。河崎八右工門と云う人が応挙の鯉の絵を持って居た。処がそれは一匹で、一匹では淋しかろうと云う事で、それにもう一匹書き加える事を依頼された。(一匹の鯉の絵を三幅持つて居たので、そのおのにおの一匹宛書き加える事を依頼された?—光井氏註)

私は応挙は無学ではあるが、絵は非常に上手なので、とてもそれに書き加えると云う様な事は出来ない。辞退したが、河崎氏より現在の日本画壇に於て応挙の絵に筆を加え得る者は君を於いて誰れが居るかと云われ、引き受けた。そして、タライに鯉を飼い、三年をついやしてやっと一匹の鯉を描き加える事が出来た。(以上九)

その間、月々の生活費をもらい、又完成後にも過分の謝礼を貰つた。河崎八右工門のお抱えになつた事で、最初の内は良かったのであるが、後になつて金の威力をみせつけられたり、その他、余り面白くない事もあつたので吾が画業は五十才を以て終りとした。

△五〇歳以後▽
そして実業方面に転向した。その

資金つくりには鯉の百幅会をして会員もたちまち満員となり相当な資金も出来た。(以上一〇)

鯉の百幅会で資金を作り、うづらを飼つて、うづら及びその卵を欧米に輸出しようとした。処が、それがうまくゆかず、卵がだぶついて値段が下り、農家を圧迫したので、卵の処理方法としてポバイト(*)を作つた。又、親鳥はカンズメとして売りさばいた。うづらの飼育器等で幾つかの特許を(註—聞き書きのこの文はここで切れる)(以上一一)

茶経は一杯から十杯の抹茶の効能が書かれて居る。私にはポバイトがあるの、人に逢う時などそれを上手に使用して最高のコンディションを保つ様に心掛けて居る。例えば、自宅で逢う時、池袋で逢う時、銀座で逢う時、その用件、時間等により上手に用い、最も良い状態にある様にして居る。それで人に逢つた後の自分など抜けがらみたになつて居るかも知れませぬ。私には「うづらの本」と云ううづらの飼育方法を書いた本がある。(以上六)

*ポバイトとは、光井氏の註によると、カフェインとうづらの卵黄が主原料の滋養強壯剤で、戦争中に特許をとり海軍にも納入していたという。戦後も細々と製造し、愛好者に配布していたとある。

平成六年度のおもな新収品

作品名	作者	制作年	材質・形状
琴棋書画図屏風	雲谷等益	江戸初期	紙本着色・六曲一双
山水人物図襖	雲谷派	江戸初期	紙本着色・襖四面
芥川之図	玉村方久斗	大正昭和初期	絹本着色金泥・軸
黄菊白菊図	〃	〃	〃
花水木二小禽図	〃	〃	〃
菊花白禽図	〃	〃	〃
紅葉二小禽図	〃	〃	〃
藤花遊禽図	〃	〃	〃
木瓜図	〃	〃	〃
養老図	〃	〃	絹本着色金銀泥・軸
松下白鶴図	〃	〃	絹本墨画淡彩・軸
双鶏図	〃	〃	〃
葡萄図	〃	〃	〃
老松図	〃	〃	〃
寒林双鶴図	〃	〃	〃
鶏翠枯水野図	〃	〃	〃
層山曙色図	〃	〃	絹本着色・額
草花帖	〃	〃	紙本着色金泥・画帖
諸道聴耳世間猿図巻	〃	〃	紙本着色金泥・二巻
風景	永地秀太	一九二二	油彩・キャンバス
変異の空間	三上誠	一九六二	板・紙・着色・額
猫になった女	桂ゆき	一九五〇	〃
怒髪天をつく	〃	一九五三	〃
しっぽの出た狐	〃	一九五四	〃
金銀線文皿	加藤重美	一九九三	陶
萩菊花文食籠	坂倉新兵衛	一九九三	〃

美術館から

12月までの常設展から

・日本画の中世と近世

室町から江戸時代にかけての山口県の日本画の歴史には、雪舟からその画系につらなる室町桃山期の画家から江戸時代の雲谷派にいたるまで多くの画家が輩出しました。このあいだの流れを館藏品でたどります。今回は近年の新収蔵品を中心の展示で、主な作品には伝雪舟「天神図」、雲谷等益「琴棋書画図」などがあります。

・藤田隆治の世界

山口県豊浦郡豊北町出身の藤田隆治（一九〇七～六五）は、高島北海ついで野田九浦に日本画を学び、日本画会・青龍社展などで活動、一九三六年のベルリン・オリンピック芸術競技では三等賞を受賞するなどの活躍をみせました。また戦後は個展を中心に毎日新聞社主催の現代日本美術展などで活動するなかで、キュビズムを研究する新しい造形実験を日本画にもちこんだのはじめ、興味深い試みも示しています。

今回は藤田の代表作を展示すると同時に、自刻の仏像や陶器の絵付け、従軍手帳へのデッサンなどで、藤田の作家像にふれていただきます。

・海を描いた絵画展

山口の工芸―萩焼と赤間硯
全国豊かな海づくり大会が山口県の北浦地域を会場に開催されるのを記念して、二つの常設展を予定しています。

ひとつは館藏品のなかから海にちなんだ作品を紹介します。一方で、江戸時代以来の山口県の伝統的な美術工芸品である「萩焼」「赤間硯」の秀作を館藏品のなかから選んで展示します。

・雪舟

当館所蔵の重要文化財の雪舟作品「山水図」一巻、「牧牛図」二幅および、新収の室町期の伝雪舟作品数点を展示。（11月22日～12月4日）

12月までの常設展

第2常設	第1常設			室 月
	資料展示	小林和作	香月泰勇	
近世 日本画の中世と 10	安井賞受賞作家展 東松照明の写真 17	藤田隆治の世界	郷土工芸	7月
			古萩と現代	8月
松澤有展のため休室 具美展のため休室	19 川田喜久治の写真	海を描いた絵画展	シベリア・シリーズI	9月
			第14回全国豊かな海づくり大会 開催記念	10月
福田勝治展のため休室 富士美術館展のため休室	22 雪舟	山口の工芸―萩焼と赤間硯	現代の陶芸	11月
			6 現代の陶芸	12月
	細江英公の写真	小林和作の世界	香月泰勇の版画	

平成6年度のおもな特別展

ドイツ・ルネサンス版画名作展
6月3日～7月10日

松澤有展
7月22日～8月21日

第四八回山口県美術展覧会
9月9日～9月28日

写真家・福田勝治展
10月7日～11月27日

第四七回山口県学校美術展覧会
12月1日～12月4日

四季の雅 富士美術館名品展
12月13日～1月29日

山口大学卒業制作展
2月2日～2月5日

山口芸術短期大学卒業制作展
2月9日～2月12日

ウィーンのジャポニズム展
2月21日～3月26日

山口県立美術館ニュース
「天花」 第五八号

平成六年七月一日発行
発行 山口県立美術館
〒753 山口市亀山町三十一
☎ 〇九三―五五―七七八
FAX 〇八三―三三―七七〇
印刷 隣報社写真印刷株式会社